# はじめに

軍隊が来れば必ず情報機関が入り込み、住民を巻き込んだ「秘密戦」[*1]が始まる。

これは沖縄戦と陸軍中野学校、少年護郷隊を平成二一（二〇〇九）年から取材してきた中で、私が確信した法則だった。しかしまさか今、それが自分の目の前で再現されるような時代に入っていくとは思いもよらなかった。平成二七（二〇一五）年から与那国島・宮古島・石垣島などに新たな陸上自衛隊基地が作られる一連の流れの中で、あたかもこの黒い法則のピースがあちらこちらでよみがえり、繋がりはじめているように感じている。例えば住民投票運動が始まり、島が賛成と反対に分断されると、誰が基地建設に反対し、誰が賛成しているのか、地域の情報が自衛隊の情報機関によって集められる。夜の飲み屋街で、誰が何党支持で、その親戚は誰かまで喋ってしまう人がいれば、その情報はすべて国に筒抜けになる。それではまるで七五年前の「スパイリスト」[*2]の再来ではないか。私は愕然としたのだが、その焦りを報道関係の仲

間や沖縄戦に詳しい友人たちに訴えても反応は薄かった。沖縄戦当時、本島北部や離島で展開された陰惨な秘密戦の様相はあまりにも知られていないのだ。だが、それは無理からぬことでもある。閉じた地域の中で起きたそれらの出来事は、身内の中に密告したり加害側に立ってしまった人がいるだけに、主に被害だけを訴える種類の沖縄戦の証言と異なり、封印されてきたからだ。

しかし、戦後七十数年という時の流れが、地域に禍根を残すというリスクを小さくしてくれたと信じたい。そうでなければこの沖縄戦の暗部を記録し、検証することが不可能になってしまう。陸軍中野学校出身の工作員たちは何の目的で四二人も沖縄の島々に張り付けられたのか。彼らはなぜ一五、一六歳の少年を集めてゲリラ部隊を作ったのか。なぜ住民たちがここまでスパイ視され、虐殺されねばならなかったのか。住民はどう巻き込まれ、また加担していったのか。激戦地となった南部の様相のみで沖縄戦を理解するのではなく、こうした裏の戦争を多くの人に知ってもらうことで、今、南西諸島が直面している、私が戦慄する危機を初めて理解してもらえるのではないか。そう信じて、平成二九（二〇一七）年、私は猛然と一つのドキュメンタリー映画の制作に向けて取材を再開した。

本書は平成三〇（二〇一八）年夏に公開したドキュメンタリー映画で、二〇一九年度文化庁

映画賞文化記録映画部門優秀賞や第九二回キネマ旬報文化映画部門ベストワンほかに選ばれた「沖縄スパイ戦史」（三上智恵／大矢英代（はなよ）共同監督作品）の取材をもとに、映画の中には登場していない方々を含む元少年兵二〇人あまりの証言に始まり、「秘密戦」を遂行した陸軍中野学校出身の隊長らの生涯や、日本軍によるスパイ虐殺の被害者側、加害者側双方の証言や資料調査などを、映画が完成してからさらに取材を重ね、一年半かけてまとめたものである。

ここで語る「スパイ」という言葉の意味は、陸軍中野学校の工作員たちが敵を欺いて情報を取るというだけでも、少年や住民を使ってスパイ戦やゲリラ戦を展開したことだけでもない。軍が住民を欺き「始末のつく」状態にすること、また軍がスパイ容疑で住民を手にかけたり、住民同士がスパイの疑いをかけあうなど、秘密戦の枠の中で「スパイ」という概念は、相互に悲劇を生む多義的な忌まわしい言葉であることも理解してもらえればと思う。

まずは第一章で、知られざる少年ゲリラ兵の証言から、読者のみなさんに、国内で唯一のゲリラ戦となった現場に身を置いてもらい、生活圏で遊撃戦をするということはどういうことなのかを、かつての少年たちの目を通して体感していただきたい。そして彼らが憧れた隊長たち青年将校が負った過酷な任務や加害性についても第二章で考察する。続いて「住民を使った遊撃戦」は全国で準備されていたことを最新取材によって第三章で明らかにする。第四章では彼

らが戦った山の中に同じように身を潜めていた沖縄の避難民たちが、また軍隊に協力し地上戦を迎えた沖縄の人々が、いったいどんな恐怖を抱えてしまったのか、証言でつづる。さらに、その恐怖を地域に与えた日本軍の「虐殺者たち」の肖像に第五章で迫る。最後に、これら一連の悲劇の根底にあった日本軍の方針を防衛研究所や国立公文書館などに残る膨大な資料の中から手繰り寄せ、第六章で考察する。旧日本軍の戦争マニュアル群を積み重ねていくと、そこにできた地層には、秘密戦が必然的に住民を犠牲にしてしまう悲劇の構造が見事なまでに浮かび上がってきた。その連続した地平の上に、今の私たちの社会があることも――。

近年日本では「スパイ天国の汚名返上」という号令の下で特定秘密保護法や、いわゆる共謀罪（テロ等準備罪）の制定など監視国家化が進んでいるが、「スパイ」という言葉が強調され、その恐怖に支配されるようになっていけば、その社会はすでに黄色から赤信号に移行したと見るべきだろう。諜報（ちょうほう）・防諜網を国民の間に徹底させていった結果、何が起きたのか、それを沖縄戦が具体的な事実をもって示してくれている。今こそ、長い間沖縄北部の村々に封印されていた証言に耳を傾けて欲しい。そして私たちはそれを、再び戦争ができる「強い国」を指向しつつある日本国民の目を覚ます良薬に昇華させなければならない。時を逸して、犠牲者たちの声が呪いに変わる前に。

なお、八重山の戦争マラリアについては映画「沖縄スパイ戦史」共同監督の大矢英代さんの著書『戦争マラリア―死者３６００人の真相に迫る』（仮題／あけび書房、二〇二〇年二月刊行予定）をご参照ください。

＊1　諜報、防諜、宣伝、謀略を指す。つまりスパイを使って情報を入手したり、身内から情報が漏れる＝スパイが出るのを防いだり、わざとデマを流したり、テロやゲリラ作戦を含む、一般に正規軍がやらない裏の戦争全般を指す。

＊2　後で詳述するが、沖縄戦で日本軍が作成した、スパイと疑う住民の名を記したリストのこと。このリストをもとに、住民虐殺が行われていった。

# 秘密戰關係書類

目次

RET WHARFA
ERY SECRET
O
Cincpoa
75
A 10 July
館
2
85

はじめに――3

# 第一章　少年ゲリラ兵たちの証言

◆第一護郷隊――26

**戦友は靖国神社にいる　前原信栄さん**――27

君らは闘鶏と一緒だよ／友達が（戦友の）手を切ってよ、手だけ持って歩いてるわけ。遺骨と言ってさ／しかし日本はよ……。何も、なーんにもわからんで戦争したかなあ／隊長の訓示「今日只今の事に死力を尽くせ」

**虐殺部隊と山に潜伏していた　宮城康二さん**――40

（米軍が）上陸した時にもう日本は負けるねえとすぐ感じた／「日本軍が殺しに来る」／人殺すのは山羊殺すより軽いくらいに考えている

**前線に酒を運んで「これで死にやすい」と仲間に感謝された　玉城貞二さん**――53

その人は死んだかもしれない／あの時分は天皇をかざせば何でもできた／自分（村上隊長）は生きているから詫びる言葉もないさ

**点呼をごまかして戦友を逃がしてやった　玉里勝三さん** ―― 63
「玉里、大本営の発表はみんな嘘だよ」／「もう絶対戻って来るなよ。君が来たら僕らまで死ぬ」／殺された少年　殺された小隊長／憎まれた下士官たち／国民も守りませんよ。国も守りませんよ。軍隊は自分は守る

**護郷隊唯一の衛生兵　比嘉久権さん** ―― 74
「三八式歩兵銃どの！　すみませんでした！」／宇土部隊に行って衛生兵の訓練を受けてこいと言われた／「我達は、女性も知らんで逝くのかな」

**村上隊長の馬番　我如古喜将さん** ―― 81
日本は神の国だもん、また私は歳は若いし、気持ちがワクワクしてね／私は村上さんが乗る馬「北風号」の飼育係／村上隊長はあんた、生き神様だよ／「赤き心」＝真っ赤に染まった純粋な真心／「反対」という言葉を使うことはできなかったんだ

**負傷した戦友を守り続けた　大城和正さん** ―― 94
赤紙が来てうれしかった／青年学校の先生。戦争になって多分味方に殺られたんじゃないか／村上隊長は素晴らしい訓示をしよったですよ／歩けない青年兵を預けられた／軍隊は正常じゃないから。正常だったら人を殺したりはしないよ

**護郷隊内部の虐殺について語った　大城哲夫さん** ―― 110
機関銃を目隠しして分解して、組み立て／ゲリラ戦はみんな着物／護郷隊なんかが、ゲリラ戦やるから、みんな家に火を点けられた／米軍も、山から下りて来る兵士を狙ってた

**中隊長が臆病だったから誰も戦死していないよ　金城重行さん** ―― 124
上官は自分で叩かない。隊員同士で向き合ってビンタさせる／女の人でも腰に一つ二つ手榴弾持ってたからびっくりした／失敗続きのゲリラ戦／「みんなスパイの教育を受けたんだよ」

**沖縄出身の幹部として唯一中隊長まで務めた　瀬良垣繁春さん** ―― 137
少年ゲリラ兵を育成／うちの中隊が一番多い、戦死者は／「お父さん殺られたけど、来るな」／父の仇討ち／セラカキを指さして教えろ／正規兵の年齢でもない子供たちが米軍とぶつかった

◆第二護郷隊 ―― 149

**戦争PTSDに苦しめられた　瑞慶山良光さん** ―― 150
ゲリラ兵は医療の器具は持ってないですからね／勝ち戦を夢見ていた軍国少年／陸軍登戸研究所の特殊兵器「ハハリユ」と「ホイキモ」／沖縄の住民はスパイになりやすいと見られて

いた／米軍上陸／第一次攻撃隊に選ばれる／たった一人で米兵の小隊と遭遇／護郷隊のかわりに犠牲になった老夫婦／頬に手榴弾の破片を受けて傷病兵に／野戦病院で遺体処理／高江洲義英君のこと／恩納岳から撤退／第二護郷隊解散／仲間に置き去りにされて／「兵隊幽霊」と呼ばれて／「戦争恐怖症」の発症／護郷隊は故郷を壊す／沖縄と基地のこと／緋寒桜は戦死した少年兵

**一人で一〇〇人射殺した　宮城倉治さん** ―― 203

なんで軍隊は叩くのかなー／だいたい死ぬのは機関銃手と弾薬手の二人と指揮者／住民の子供のふりをして米軍に捕虜にされて／国は僕たち護郷隊を全然兵隊として扱ってない

**ある家族の虐殺が頭から離れない　前田孝昌さん** ―― 219

ハハリユ、ダイナマイト、サクラ、黄色薬／一週間で骨だけになって、頭がなくなっていた／歩けない連中は後で銃殺をやってる／海軍は「お父さんをすぐピストルで殺った」／「明日我々はアメリカに投降するんだ」／基地がある所にしか弾は来ない

**軍人勅諭を真っ先に覚えた　奥島憲次郎さん** ―― 233

長髪で、ぴゃっと油つけた若い青年将校／全部長髪ですからね。普通の兵隊じゃないという感じがした／軍人恩給？　護郷隊にはそんなのないですよ／知名巡査というのは相当評判悪かった

**置き去りにした戦友と戦後再会した　宮城清助さん** ―― 242
四月から八月くらいまで、何カ月も着替えはないんですよ／敵の食糧庫、弾薬庫を爆破する練習／合言葉が言えず日本刀で斬られた友達／岩波隊長が軍刀引き抜いて先頭になって／死ぬ時に天皇陛下万歳と言って死んでいくと言いますよね。あれは嘘です／「宮城さんという人が米軍のスパイになっている」／犠牲の多寡は指揮官による

**戦死した戦友の豆で飢えを凌いだ　大城弘吉さん** ―― 256
急いで橋壊しても米軍はすぐ修復する／隊長さんたちは歩けない人たちをピストルで全部殺ってるわけ／友軍同士で突き合いして亡くなっている人もたくさんいる／何があっても戦争したら大変なことになる

**高江洲義英君の銃殺を目撃した　仲泊栄吉さん** ―― 267
少年兵が一〇キロ爆弾持ってアメリカの戦車を爆破しに行った／一番臭いのは、人間のあれ／毛布をかぶらされ処置された傷病兵たち／軍は戦争になったら飯も住民のを泥棒して食う

**子供の着物で自在に敵陣に出入りしていた　金城幸昭さん** ―― 279
嘉手納飛行場攻撃に行く選抜隊に／第二小隊はいつも最前線だった／明日誰が死ぬかわからない地獄の生活／子供の着物を着けてスパイ活動

**読谷にいる時から負けるとわかっていた　池原義正さん** ―――― 290
子供と大人の戦／護郷隊のことはみんなの前で一度も話したことはないよ
**激戦地・三角山の戦闘を生き抜いた　親泊康勝さん** ―――― 296
現場では、お母さん、アンマーと言ってみんな死んでいったよ／頭を飛ばされて死んだら幸福だなあと思った／動けない人たちは、殺す／あの中野学校の上官たちはきつくなかったよ
**恩納岳陣地と戦闘を絵と短歌にした　平良邦雄さん** ―――― 308
ネズミが夜中にぐるぐる私の周りを、チーチー言いながら回っているわけ／戦死した恩人の銃剣術の教官／有毒だったハハリユ／海にはアメリカの軍艦がびっしり／赤痢になり「もうおしまいだから放っておいてくれ」と言った友人／子供のふりをし姉に手を引かれて収容所を脱出

# 第二章　陸軍中野学校卒の護郷隊隊長たち


1　護郷隊を率いた二人の隊長 ―― 330

2　村上治夫　第一護郷隊長について ―― 334

村上治夫の生い立ち／部下の心をつかむ／陸軍中野学校へ／沖縄での第一歩／「護郷隊」結成へ／村上、もう一つの顔／忍び寄る「スパイ」の恐怖／「避難民」に頭を抱える／富村順一が見た村上大尉／村上治夫の「敗戦」／投降の三つの条件／村上治夫、慟哭す

3　岩波壽　第二護郷隊長について ―― 378

多感な少年時代／青年将校への道／陸軍中野学校へ／沖縄で「護郷隊」編成／遊撃戦準備／恩納岳の戦い／恩納岳陣地の乱れ／恩納村民への食糧の提供／恩納岳陥落と解散／第二護郷隊幹部の投降／沖縄再訪／恩納岳の残像／お尻を真っ黒にした少年たち

4　二人の隊長が遺したもの ―― 404

# 第三章　国土防衛隊――陸軍中野学校宇治分校

◆全国各地で準備されていた少年ゲリラ兵部隊――410

**私は岐阜の山河を守る少年ゲリラ部隊の教官だった　野原正孝さん――412**

この部隊が組織されているということは永久に極秘のはずだった／陸軍中野学校宇治分校／スリ、家宅侵入、爆破、不発弾処理……中野学校の訓練／「敵の武器を取って戦え」――ゲリラ訓練の実態／「死ぬな」が原則の国土防衛隊／国土防衛隊は日本中で作られていた／ゲリラ戦準備から敗戦へ／住民は兵器やで、消耗品やもんね／中野学校の一員、という意識はあります

**爆弾抱えて死ぬ訓練をした岐阜の少年兵　小森智さん――432**

国土防衛隊という名前は聞いていた。ほかはすべてが極秘という部隊／戦車が来たら自爆する訓練

◆護郷隊と国土防衛隊に見る戦争の本質――439

# 第四章　スパイ虐殺の証言


◆封印された「住民虐殺の証言」 444

◆国頭村の住民虐殺

今だから話せる国頭の住民虐殺　上原一夫さん 446

国頭にもあった「スパイリスト」／「ザークビー」の虐殺／浜のもう一つのスパイ虐殺

友軍が私たち民間人を殺すんだのに　島袋キクさん 458

友軍が私たち民間人を殺す／基地を作れば戦場さ

◆大宜味村喜如嘉の知名巡査の殺害

もちろん、住民がかかわっていますよ　福地曠昭さん 462

あの家はスパイだと烙印を押された家がいくつもありました／山に連れて行かれて。木に縛られて銃剣で突かれた

紫雲隊の井澤は敗残兵ではない　平良俊政さん 467

当時ここは畑でしたけど、血が木にべっとりついてね／喜如嘉を守りたい、監視しないといかん、という気持ち／戦争負けてないと思っているから、神風が吹くだろうと／敗残兵という言葉は日本人には使ってはいけない言葉だった／誰だったということも知っているけども、名前は言えません／昔の教育受けてる人たちは、上の人たちに反対はできませんよ

◆今帰仁村の住民虐殺

## 一八歳でスパイリストに載った少女　中本米子（旧姓　嶺井）さん

482

兵隊が穴掘ったら、これをモッコに入れて外に出す。こういう仕事でした／人の足や板がいっぱい浮いていた海／あれが一生の別れだったんだな／ある日夕飯を食べていたら、「ヨネちゃん」と呼ぶ声がした／「ヨネちゃん、どこかに逃げなさい、殺されるから」／戦争中、地下の巨大な倉庫に入ったことがある／スパイ虐殺が記録されていた武下少尉の従軍日記／米兵に襲われる／名前は出さないでくださいよ。またやられるかもしらんから／四つ目の危機

◆日本軍の中で起きていたスパイ虐殺

## 虐殺壕にいた一四歳の少年通信兵　宮平盛彦さん

513

首里にある「一中健児之塔」の前で／「通信隊」の二等兵／一中生に憧れて／家族との永遠の別れ／沖縄戦終結も、敗戦も知らず／津嘉山の壕の悲劇／北海道の遺族と繋がる／払拭できない思い／捕虜になる

◆兄を救えなかった少年水兵 ―― 539
魚雷艇で特攻出撃をした少年水兵　幸喜徳助さん ―― 540
沖縄も二等国民と言われた／沖縄の人は何でもいいから皆殺しということ、考えていたんです／子供は死んでいるお母さんのおっぱいをチューチュー吸ってたんです／「もう戦争も終わって落ち着いているから早く出て来なさいよ、兄さん」
◆敵と通じたと疑われたら殺される
僕でも思うよ「スパイは殺せ」　玉城秀昭さん ―― 554
アメリカと通じたら大変／「殺しておかないと自分たちが殺される」という心理／悲鳴を聞きながら、みんな黙々と畑を漁る／集団自決からの生存者はその事実をタブーにする
◆『読谷村史』に記録された「虐殺未遂」 ―― 563
◆住民虐殺は「殺人」である ―― 565

## 第五章　虐殺者たちの肖像

**1　第五六飛行場大隊　紫雲隊　井澤曹長について**――570

喜如嘉米軍将校狙撃殺害事件とは／喜如嘉の少年が見た「紫雲隊の井澤」／紫雲隊とは／紫雲隊がかかわった住民虐殺／国頭村の虐殺事例／復員していた井澤／読谷村民と井澤曹長／井澤曹長の武勇伝／追記・戦後の「井澤清志さん」の足跡を訪ねて

**2　運天港　海軍特殊潜航艇隊将校　渡辺大尉について**――599

渡辺大尉に関する証言／少年兵が見た「渡辺大尉」／米軍に見破られた海軍大尉／渡辺大尉　謎の消息／元海軍兵たちが恐れていたこと／「渡辺」を封印したのは誰なのか／行動を共にした運天の女子青年団員について／追記・渡辺大尉らを支えた三人の女性について／男性社会が生み出す沖縄戦証言のゆがみについて

**3　運天港　海軍魚雷艇隊　武下一少尉について**――631

軍用手帳に、スパイを殺害したという記述／太田守徳さんの虐殺／住民のスパイ防止、寝返り防止の任務／「我々は敵と通じる者に対してはなんの容赦もしない」／武下少尉が観音様になっている／亡き息子の影を求めて／軍隊による自国民の虐殺はなぜ封印されたか／「戦果、戦艦又は巡洋艦2乃至3隻撃沈、我が方損害なく全艇帰投」／武下少尉殺害の陰にある「密告」の真相／女性スパイ説／一八歳の屋我地島の女性の写真／海軍の残虐行為を知る人々の気持ちの変化

# 第六章　戦争マニュアルから浮かび上がる秘密戦の狂気


## 1　沖縄本島北部の山中で見つかった「秘密戦に関する書類」――678

「国士隊」結成式／目的は内部スパイの摘発／スパイリスト／民間指導者層の加害性

## 2　暴走する戦争マニュアル「戦闘教令」の変遷――688

最初の教令（ア）「島嶼守備部隊戦闘教令（案）」（一九四三年一一月）／水際作戦を放棄した（イ）「島嶼守備要領」（一九四四年八月）／長期持久戦に移行する（ウ）「上陸防禦教令（案）」（一九四四年一〇月）／住民を使った遊撃戦の原点（エ）「遊撃隊戦闘教令（案）」（一九四四年一月）／国土上陸を想定した遊撃戦マニュアル（オ）「国内遊撃戦の参考」（一九四五年一月）／島民の直接戦闘能力を強化する（カ）「南西諸島守備要領」（一九四五年一月）／日本国民の戦力化（キ）「国土決戦教令」と（ク）「国民抗戦必携」（共に一九四五年四月）／「国民義勇隊」から教令の末路（ケ）「国民義勇戦闘隊教令」（一九四五年六月二四日）へ

## 3　秘密戦が民衆にもたらすもの――712

## 補稿　住民はいつから「玉砕」対象になったのか――719

おわりにかえて――始末の悪い国民から始末のつく国民へ――723
教令一覧――740
本書関連地図――744
参考文献――746

図版作成／ＭＯＴＨＥＲ
写真協力／平田守・桃原英樹・大矢英代・比嘉真人・中島和也・大賀由貴子
特別協力／橋本佳子・木下繁貴

＊引用に際し適宜、漢字の旧字体を新字体にあらため、難読の部分にはルビを施し、一部の片仮名表記を平仮名に置き換え、明らかな誤植は修正しました。また、引用文中の傍線および［　］内の註釈は、筆者によるものです。

＊引用文中および沖縄戦等に関する証言において、今日の人権意識に照らして不適切と思われる表現がありますが、時代背景と史料的意義に鑑み、修正・削除を行わずに掲載しております。